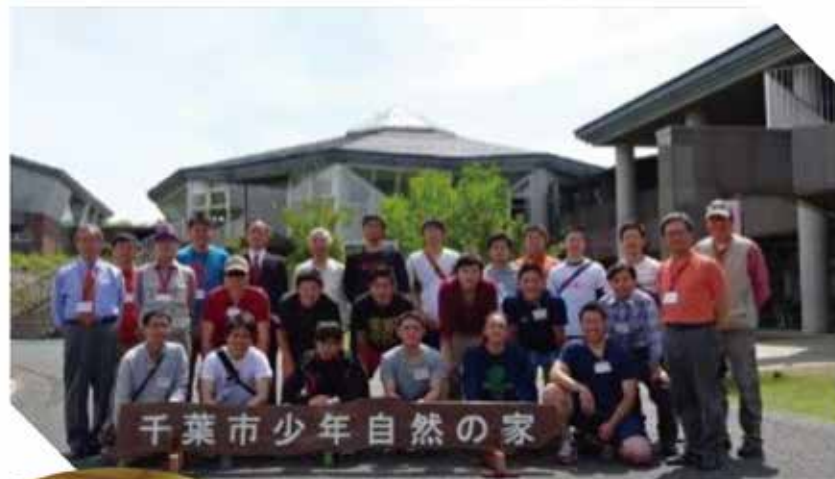




ボルダリング講習会
@グリーンアロー幕張 6月14日



千葉市CI講習会
@千葉市少年自然の家
5月23-24日、31日



アウトドアチャレンジ「火起こし」
@国立オリンピック記念総合センター
6月13日

5. 事務局より

昨年、本協会は設立30周年を迎えました。今年は新たな10年に向けて歩み始める年。そのために、これまで以上に広報活動に力を入れ、会員の皆さまとの連携を密にとりながら、千葉県のカンパ・野外活動を盛り上げていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

発行者：NPO法人千葉県キャンプ協会 篠塚 博道（会長） 編集者：坂本拓弥（広報）
連絡先：〒263-8522千葉県千葉市稲毛区弥生町1丁目33番地
国立大学法人千葉大学教育学部下永田研究室内
TEL：080-9534-1234 FAX：043-290-2620
HP：http://chiba.camping.or.jp/ E-mail：chiba@camping.or.jp

Chiba Camping Association



NPO法人千葉県キャンプ協会
Camping Association of Chiba

目次

0. 巻頭言
1. 平成26年度活動報告
2. 平成26年度活動決算報告
3. 平成27年度活動計画
4. 平成27年度
第1回実施事業報告
5. 事務局より

巻頭言

ライチョウの卵の人工ふ化の ニュースを聞いて感じたこと

会長 篠塚 博道

北アルプスの乗鞍岳で採取したライチョウの卵10個のうち5個を、上野動物園でふ化させたというニュースを聞き、新潟県の妙高高原にある笹ヶ峰キャンプ場の管理をしていた若いころのことを思い出しました。

笹ヶ峰から見て妙高山の手前の火打山山頂付近にはハイマツの群落があり、ライチョウが生息しています。7月の末頃にヒナを連れた親鳥が見られた当時、孵化率は90%を超えているにもかかわらず3か月後のヒナの生存率は30%に下がるという地元の研究家の調査結果を耳にした記憶があります。

挙げられていたヒナの生存率の激減の原因は、

- ①登山者によるもの・夏休みに入って急増する登山者の姿を見つけたヒナを連れた親鳥は、羽をバタバタさせて人の注意をヒナからそらせる行動を取り、人がいなくなるとヒナのところに戻すが、もといいたヒナの数を確認しないで自分のテリトリーに連れて行ってしまいうため、迷子になったヒナは他のライチョウのテリトリーに入り込み、殺されてしまう。
- ②本来生息していない動物によるもの・登山者が捨てたゴミや残飯などを求めて、本来その地域には生息していない、ホシガラスやキツネが高山地帯まで登ってきて、ヒナが捕食されてしまう。

ということでした。

ヒナの生後3か月後の生存率の話が、私の中でライチョウの親子を見たことがあるという経験からヒナの命を守るためにはどうしたらよいかという思いに変わったのです。

火打山登山を計画している団体にこの話をして、「だから、山ではごみを捨ててはいけません」というなかなか説得力のある呼びかけをしたりもしました。

キャンプ活動には「体験」が大切な要素として組み込まれています。私たちが、初心者はこの活動を伝える時には、まず、「キャンプの楽しさ」を「体験」してもらうことは、とても大切なことだと思いますが、2015年6月発行の公益社団法人日本キャンプ協会のMONTHLYREPORTで専務理事の金山竜也氏が、「体験」ということについて書かれている記事を読んで、「体験」が単なるお試しにならないように気をつける必要があることを改めて感じました。

体験の意味について金山氏は「個々の主観のうちに直接的または直感的に見出される生き生きとした意識課程や内容」「個々人のうちで直接に感得される経験。知性的な一般化を経ない点で経験よりも人格的・主観的な意味を持つ」という定義を紹介しています。

組織キャンプのプログラムには、様々

な視点からのアクティビティが準備されますが、その活動の底流をなすもの、言い換えれば企画した側の「願い」が、どこまで具体化できるかが大きな課題であると思います。私は、それは「感動の体験」だと考えています。

中学1年生の時に初めていった、尾瀬ヶ原で体にぶつかるほどたくさんいたアキアカネに出会ったこと、下山時に富士見峠から夏のシーズンに数回しか見られないという富士山を遠望して感動したことが、私の野外活動の原点になっています。

キャンプリーダーのみなさん、キャンプ活動のサポートをするとき、是非「願い」を持ったリーダーとしてキャンパーに関わってください。そして、参加した一人ひとりが「感動の体験」を持てるようなプログラムを提供してください。心から願っています。

